5 章 2015 年度 COC 事業による活動の「評価」

評価部門による概要
学生による評価
教員による評価
地域住民による評価
外部評価委員による評価

平成 27 年度　評価部会による評価

Ⅰ. 概要

神戸市看護大学の「地（知）の拠点整備事業（COC）」は、事業の評価と効果的な運営のために、事業開始時から評価部会を設置し、評価を行っている。

１．評価部会の活動方針

評価部会は、次に示す個別評価と全体評価を綜合して評価を行っている。
①**個別評価**：授業や講演会等の担当者が、各事業の参加者を対象にして、事業の有効性を評価するために、質問紙などによって行う評価。
②**全体評価**：評価部会が独自に、地域住民、学生、教員、外部有識者を対象にして、COC 事業全体の認知度や進捗状況の認識、改善点などについて評価するために、質問紙や面談などによって行う評価。
評価部会は PDCA サイクルに沿って、次のように評価を行っている。
①全体評価ガイドラインを作成する（表 1）
②達成目標・評価指標を作成する（表 1）
③実績報告により定性・定量的評価を行う
④結果を踏まえて発展的な見直しをし、実施計画を作成する

表 1 全体評価ガイドライン

対象	方法	時期	評価指標
学生	アンケート調査（数値評価）	毎年	学生がどのぐらい地域への関心、志向性をもっているか 学生がCOC事業の結果どのぐらい知識をもっているか
	アンケート調査（数値評価および自由記載）	毎年	本学の社会貢献活動をどのぐらい知っているか 本学の社会貢献活動にどのぐらい参加しているか COC事業をどのぐらい知っているか
		毎年	COCへの参加が役立っていると感じているか COC事業を改善するにはどうすればよいか
	座談会による聞き取り調査	H27、29	COCCへの参加が役立っていると感じているか COC事業を改善するにはどうすればよいか
	数値評価（就職先の調査）	毎年	COC事業の結果、学生の就職先がどのように変化したか
教員	アンケート調査	毎年	目標達成度についてどのように考えているか教育領域についてどのように評価し、改善点を考えているか 研究領域についてどのように評価し改善点を考えているか

			地域貢献領域についてどのように評価し改善点を考えているか COC全体の評価と改善点をどのように考えているか
外部委員	外部評価委員への聞き取り調査	毎年	教育、研究、組織運営、地域貢献の各項目について、目標の達成度および改善点についてどのように考えているか
	アドバイザリー・ボード委員への聞き取り調査	毎年	COC事業の有効性および改善点についてどのように考えているか
地域住民・自治体	座談会による聞き取り調査	H26、27、29	各事業に参加してよかったか 日常生活で各事業の効果が現れているか 学生が参加していることを評価するか 自分の参加が学生の教育に役だっていると感じているか 何らかの形で地域のコミュニケーションの促進につながっているか
	アンケート調査	H26、27、29	
	運営会議での聞き取り調査	毎年	各事業の有効性および改善点についてどのように考えているか

２．平成 27 年度の全体評価の概要

以下では、平成 27 年度に行った①学生、②教員、③外部委員、④地域住民・自治体を対象にした調査と、それにもとづく評価および次年度の行動計画の概要を示す。詳細は次ページ以後を参照していただきたい。

表 2 平成 27 年度の全体評価のための調査概要

対象		方法	時期	評価項目
学生	学部・専攻科・大学院(394名中259名の回答)	匿名自記式調査	H27年12月	基本情報（学年、居住地、居住年数）、神戸市に関する意識と知識、本学が実施している社会貢献活動、継続看護・訪問看護に関する知識と意識、卒業後の進路希望に関する44項目（文科省作成項目を含む）
	学部6名	聞き取り調査	H27年12月11日	事業に対する認識と参加、目的達成に向けての進捗状況、教育の進捗、研究の進捗状況
教員	教員75名中32名の回答	聞き取り調査	H27年12月11日	事業に対する認識と参加、目的達成に向けての進捗状況、教育の進捗、研究の進捗状況
外部委員	外部評価委員2名	聞き取り調査	H28年2月	教育、研究、組織運営、地域貢献のそれぞれの項目について、目標の達成度および改善点についてどのように考えるか
	アドバイザリー・	聞き取り調査	H27年11	COC事業の有効性および改善点についてどの

	ボード委員12名		月6日	ように考えているか
地域住民・自治体	地域住民・自治体（445名中372名）	アンケート調査	H28年1-2月	事業に対する認知度、事業情報の入手先、全体的評価、事業継続の希望、教育への効果、地域活性化、
	地域住民・自治体6名	運営会議での聞き取り調査	H27年10月28日	事業の評価と改善点
	自治体代表1名	アンケート調査	平成28年1月	事業の評価と改善点

３．調査結果と次年度活動方針のまとめ

①学生への調査結果と、それにもとづく評価と行動計画

【評価】

コラボ教育科目については、地域住民の方々と触れ合う授業や演習への肯定的発言が多く見られた。ともすると病院などのベッドサイドにしか目が行かない学生たちにとって、非常に貴重な学びの機会となっていることが窺われた。一方、神戸市や本事業に対する認知度等については賛否両論であり、特に「COC という名前が一人歩きしていて、中身が見えない」という指摘は、学生以外の評価においても同様な課題が浮き彫りとなっている。こうした点を見据えた行動計画が必要であると考えられる。

【行動計画】

調査結果を踏まえ、本事業の行動計画として下記の 3 点を盛り込むこととする。過去 2 年間と共通した部分があるが、それらは過年度において十分な効果を上げていないと見られることから、あらためて計画に組み込むものである。

(1) 地域志向性の向上に対する早期からの働きかけ

学生の地域志向や関心は高止まりしており、その割合は低学年ほど低い傾向がある。このことから、例えば高校生対象のオープンキャンパスの際や入学初期の時点で、本事業の説明会を開催するほか、コラボ教育をこれまで以上に早期から積極的に推進していく。

(2) 本事業の中身の見えるような認知度向上への取り組み

これまで「COC 事業」という事業名のみの PR が目立つ一方、その目的や具体的な内容の周知が不十分であることが示唆されている。このことから、本事業に関して丁寧かつ具体的な中身に突っ込んだ解説や討議を心がけ、常に全体像を意識した教育を関連科目において実施していく。

(3) 地元就職希望者の増加のための対策の重点的実施

２７年度に採択された COC＋事業の目的との整合性の観点から、本学の地元である神戸市（あるいはその他の兵庫県内）への就職希望者を増やすことを、目標として明確に位置

づける。そのための関係機関（市民病院群など）や連携校とのキャリア支援上の連携・協働を充実させていく。

②教員への調査結果と、それにもとづく評価と行動計画

【評価】

COC 事業の目標達成については質問 6 項目中 4 項目、教育の進捗状況については質問 3 項目中 1 項目、研究の進捗状況については質問 2 項目中 1 項目、社会貢献の進捗状況については質問項目 2 項目が、平成 25・26 年度に比べ平成 27 年度において順調・概ね順調とした教員の割合が増加した。COC 事業開始 2 年半を経て、事業内容が教員に理解され浸透し、事業遂行に直接携わる教員が増加し、COC 事業の目標達成に向けて大きく進んでいることわかる。そして、COC 事業に関わる教育、研究、社会貢献において COC 事業の成果が得られつつあることが考えられた。

【行動計画】

本調査での質問紙回収率は平成 27 年度においても 56%程度であり、COC 事業に対する教員の意識調査結果の解析において統計的に影響が出る可能性がある。本調査に対する実施に一層の広報と教員による調査協力への強化が必要と思われる。さらに、平成 26 年度に全教員の 15%、平成 27 年度では全教員の 11%が新たに本学に転入してきた教員である。本調査おいて、新しい教員の COC 事業への意識は調査結果解析のバイアスとなって影響することも考えられる。以上のことから、今後、全ての教員を対象とした COC 事業に対する一層の啓発活動の推進と事業実施への取り込みが重要と考えられた。

③外部評価委員への調査結果と、それにもとづく評価と行動計画

【評価】

概ね順調に進捗しているとの評価に加えて、次の点について提案があった。

(1)アドバイザリー・ボードにおいて、COC 事業の活動を終了後も継続するよう希望が出された。

(2)同じく、他大学、他職種、他の医療施設と連携して COC 事業を発展させることが期待された。外部評価委員からも、「医療連携の強化」に力を入れることが提案された。

(3)外部評価委員から、スケジュール表や評価指標を導入して「見える化」を進めること、達成度を数値で示し内容の質的評価を加えること、などのアドヴァイスがあった。

(4)外部評価委員から、アンケートの回収率向上について工夫の余地があるという意見があった。

【行動計画】

以上の評価に基づいて、次年度の行動計画として次のように提案する。

(1)「医療連携の強化」をより積極的に事業に組み込むため、医療施設の看護職や他職種と連携した教育の可能性を探る。

(2)可能な限りスケジュール表や取組毎の客観的指標を提示し、達成度が見えるよう工夫

する。

(3)事業を中心的に担当する教員とそれ以外の教員との情報共有と連携を強める。情報共有の強化によって、評価アンケートの回収率の向上も期待できる。

④住民・自治体への調査結果と、それにもとづく評価と行動計画

【評価】

昨年のアンケート調査で課題として浮き彫りになった COC 事業に対する認知度の低さの問題は、非常に改善されたことがわかる。アンケートの回答パターンとして、わからない、あるいは無回答といった回答保留の割合が減少していることもこれを裏付けている。地域住民が民生児童委員から情報を得る機会が多いことに焦点を当て、これら委員の方々の意見を元に PR 活動を行ったことが効果を上げているものと思われる。

事業の認知が高まるにつて、事業内容への肯定的な回答が増加しており、事業そのものが住民に肯定的に受け入れられていると言える。学生との交流に対する肯定的な意見や、事業継続に対する肯定的な意見が増えていることからも、COC 事業の本来の目的に沿った効果が現れていると思われる。

【行動計画】

住民同士のコミュニケーションに関しては、昨年に比べて増加しているとは言え、期待したほど大きな増加につながっているとは言えない。住民と本事業の関係が 1 対 1 になるのではなく、本事業に参加することを契機として住民同士の横のつながりを促進できるような工夫が必要であろう。

II．学生を対象としたCOC事業に関する調査と評価

1. 調査結果の総括・評価

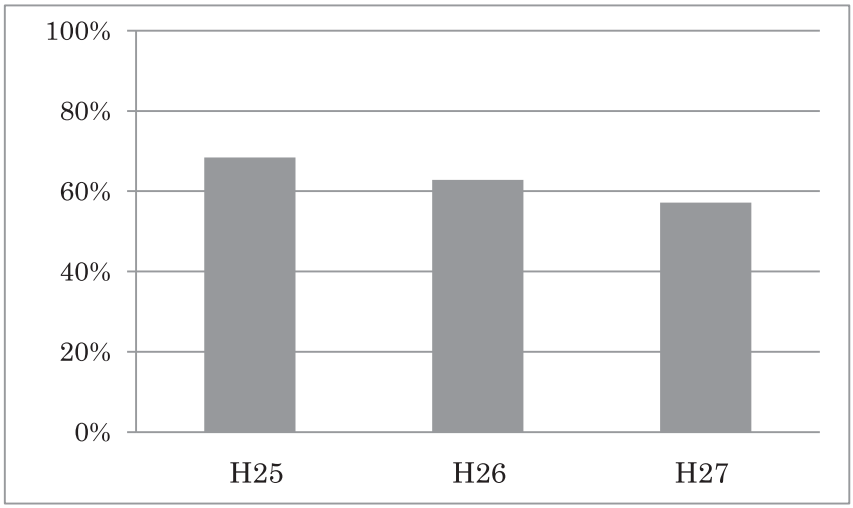
１）質問紙調査

(1) 概要

平成２７年度に本学在学中の学生（学部・専攻科・大学院） 394名を対象に、本事業開始後３年度目の質問紙調査を実施した。回答者数は学部学生238名、大学院生21名、回答率は65.7%であった。回答者のうち60名（25.3%）が神戸市出身、77名（32.5%）が神戸市以外の兵庫県内出身であった。また、回答者の57.1%が調査時点で神戸市内に居住していた。

以下に、過去3回の調査結果のうち、学部学生を対象とした質問項目の結果をグラフで比較する。大学院・専攻科の結果を比較から除外する理由は、本学の特質上、就職の意向などに関する質問の該当性が非常に低いためである。２５・２６年度の回答者数はそれぞれ263名と258名であった。

神戸市に住んでいる

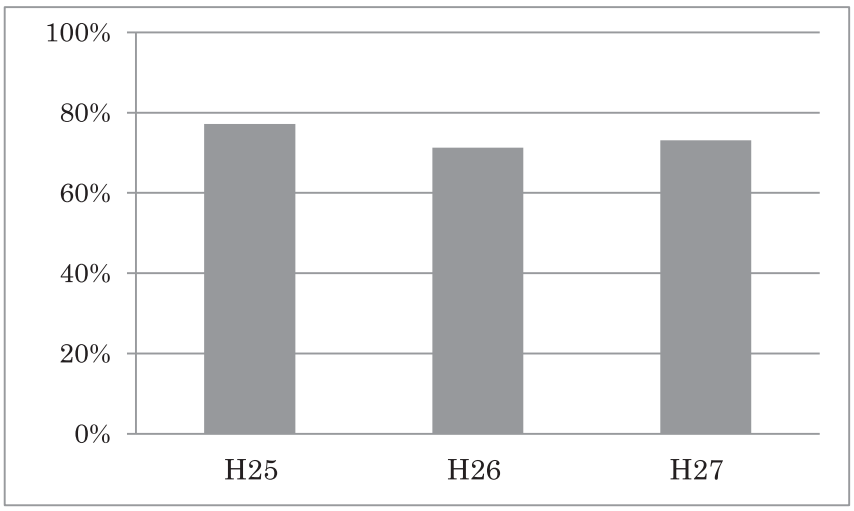


まず基本属性として、出身地と現在の居住地を問うた。調査時点で神戸市に住んでいる学生の割合は、上のグラフのとおり、この3年間で減少している。２７年度の場合、57.4%であるが、そのうち出身地が神戸市である者は12.6%であることから、神戸市在住の学生の約8割は、兵庫県内の他市町村や県外出身者であることがわかる。この3年間の減少傾向が、以下のいくつかの項目の結果に影響していることが推察される（後述）。

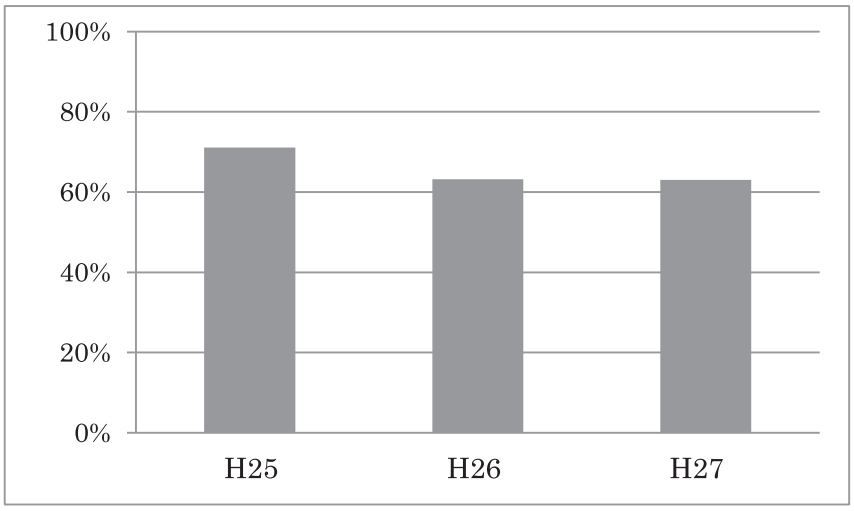
(2) 地域への関心・志向性

各質問に対して「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と回答した者の割合をパーセンテージで示した。なお、無回答は集計から除外した（以下同じ）。

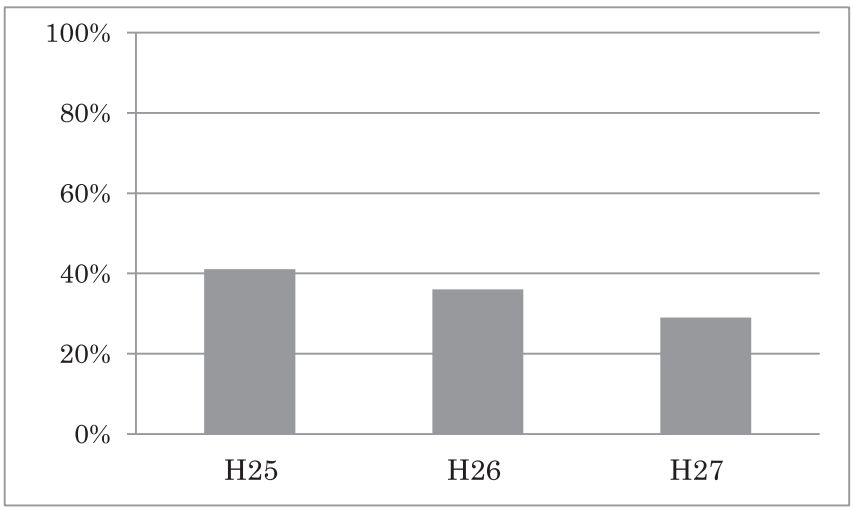
神戸市に関心がある



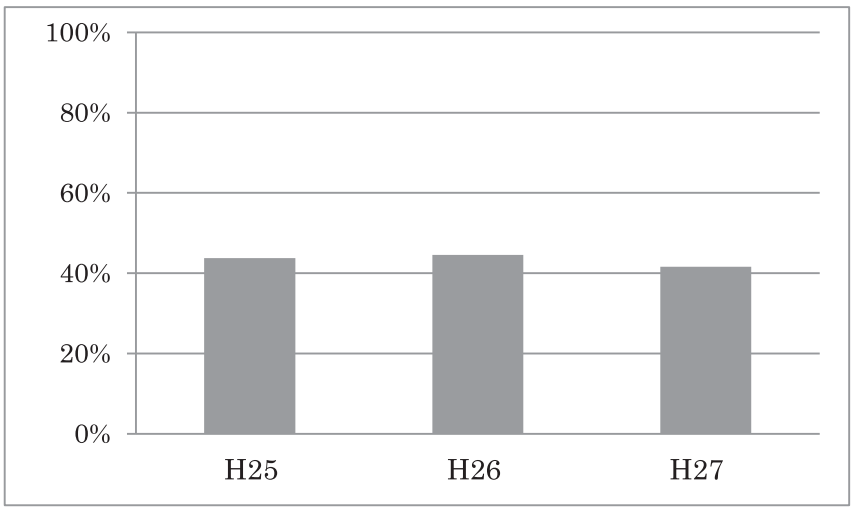
神戸市に愛着がある



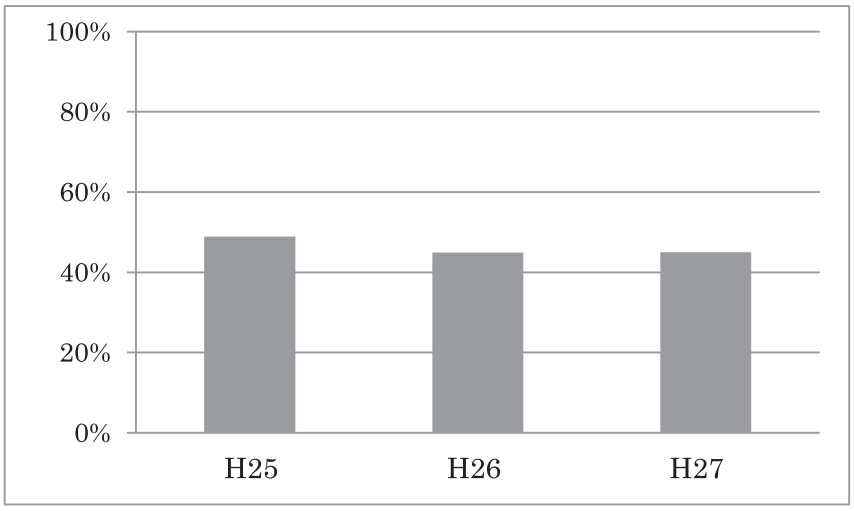
神戸市の自治会・町内会活動、ボランティア活動に関心がある



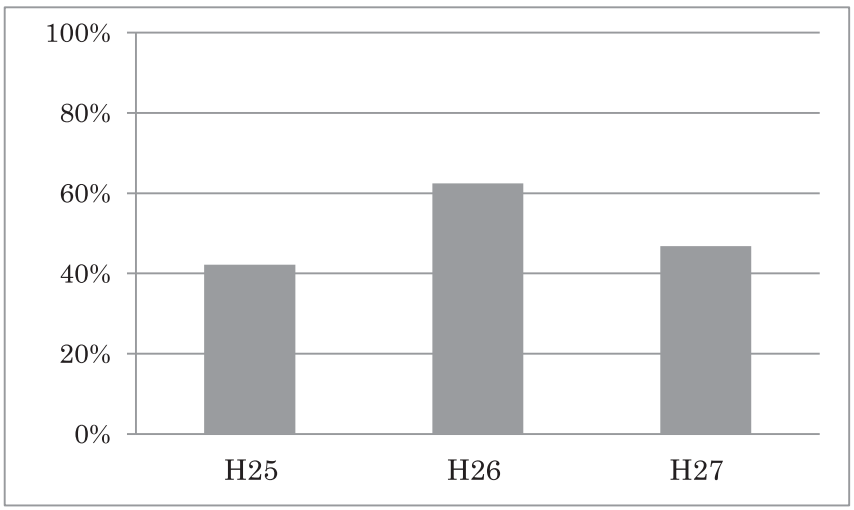
神戸市の自治会・町内会活動、ボランティア活動に参加したことがある



地元の自治会・町内会活動、ボランティア活動に関心がある



地元の自治会・町内会活動、ボランティア活動に参加したことがある



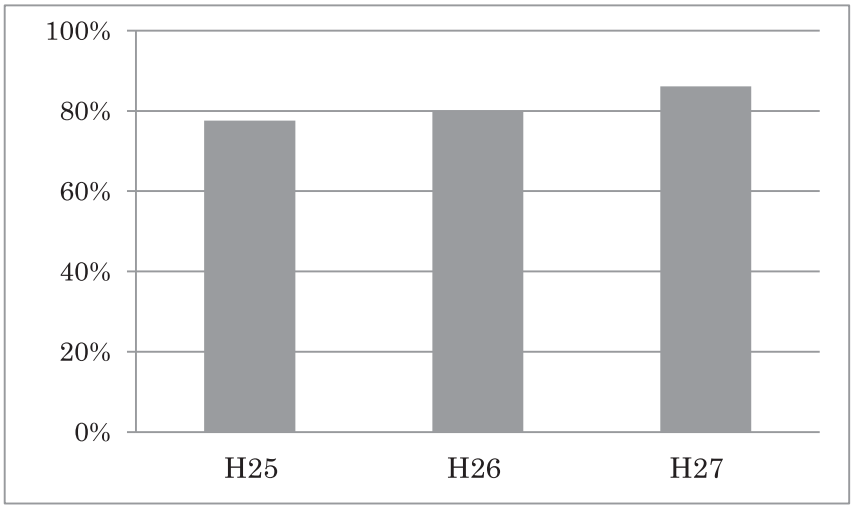
本学の所在地である神戸市に対する関心・愛着について、3 年間の調査結果を比較すると、残念なことに肯定的な回答をした学生の割合は漸減している。グラフには示していないが、集計結果を学年別に見

ると、学部 1 年生ではこれらの割合が 30%を下回っている。神戸市での地域活動やボランティア活動についての関心も、3 年間で肯定的な回答をした学生の割合が単調減少している。その一方で、神戸市または自分の地元での地域活動やボランティア活動に参加経験のある学生の割合には減少傾向が見られない。このことから、神戸市に対する愛着や関心の減少は第一義的に、神戸市の居住者の割合の減少を反映しているものと解釈できる。しかしながら、本事業の効果という観点で言えば、この 3 年間で学生の地域志向性を向上させるような成果が挙がっているとは言えないことになる。これはやや落胆させられる結果である。特に 1 年生の関心が低いことから、地域への関心を高めるような方策を入学当初のできるだけ早い段階から積極的に推進することの必要性が示唆されたと言える。

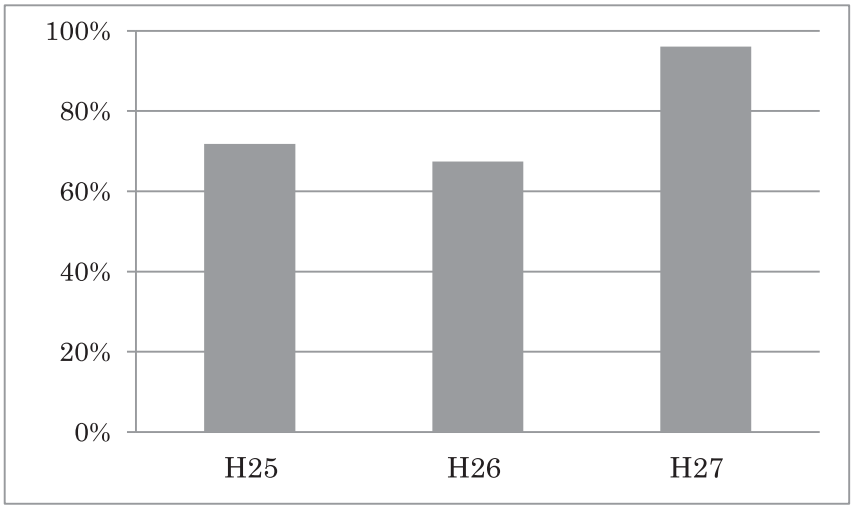
(3) 本学の COC 事業に関する認知度・参加度

各質問に対して「はい」と回答した者の割合をパーセンテージで示した。

本学が「地域のための大学」として地域に関する教育・研究・社会貢献活動を推進していることを知っている



本学が「地域のための大学」として実施する授業科目を受講している



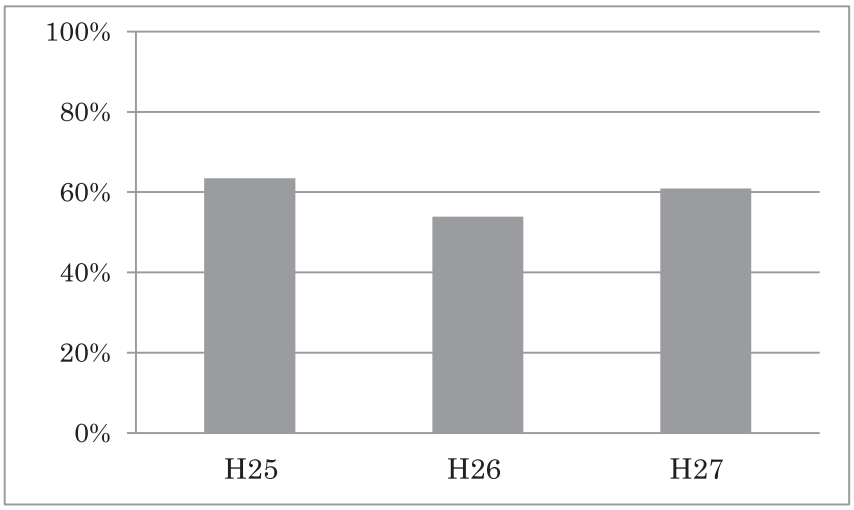
本事業の認知度やコラボ教育への参加状況に関しては、3 年間で経年的に増加している。中でも、本事業の中核の一つである「コラボ教育」でその傾向が著しい。ただし、本事業では全学の取り組みが求め

られていることから、目標値は100%に置くべきであり、その点ではまだ目標達成できていない。前節(1)で、1年生の神戸市に対する関心が低いことに言及したが、その関心が高まるきっかけとなるのが、これらのCOC科目である。関心が高まることにより、地域の理解にもつながり、地域志向性が高まるという効果が期待できる。したがって、COC科目の内容拡充や目的のさらなる鮮明化が、目標達成へ向けての推進力となるものと考えられる

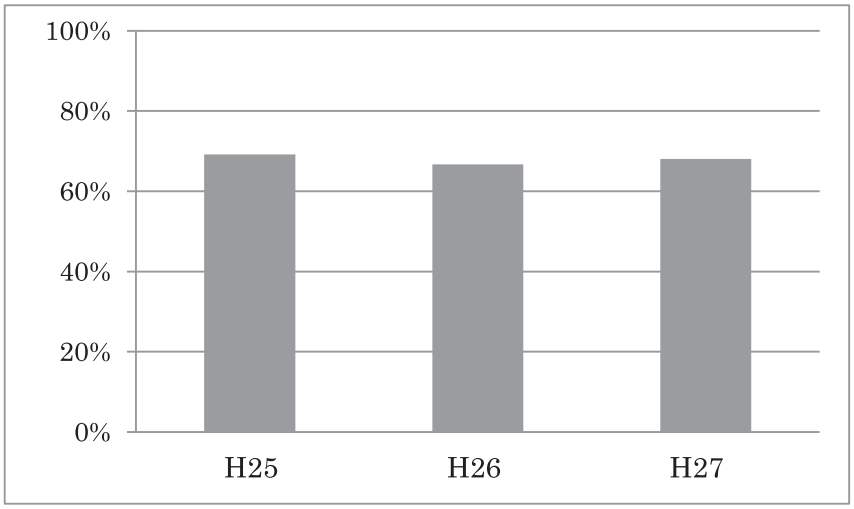
(4) 地域の保健医療福祉専門職の役割に関する知識・理解

各質問に対して「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と回答した者の割合をパーセンテージで示した。

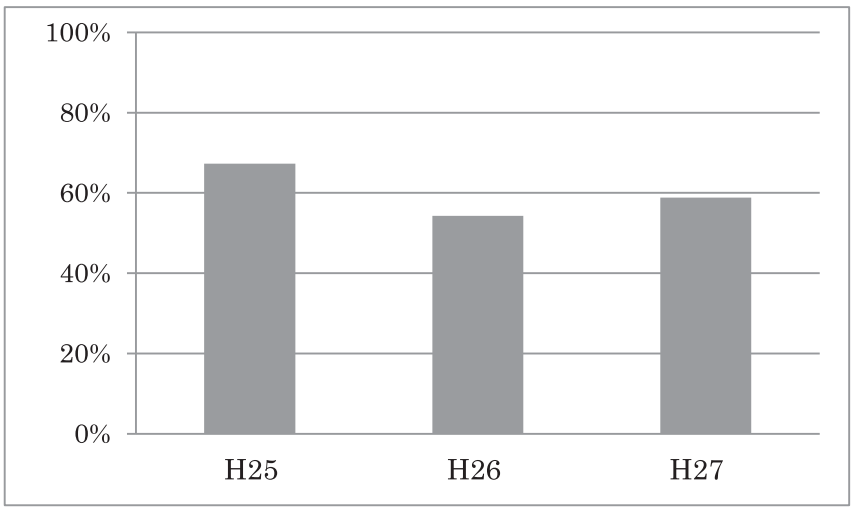
「継続看護」という言葉の意味を知っている



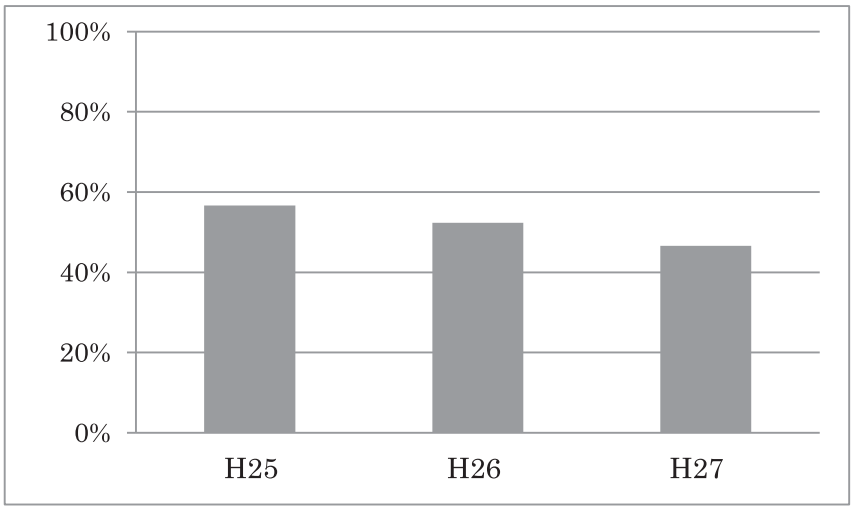
病院における地域連携部門の役割を知っている



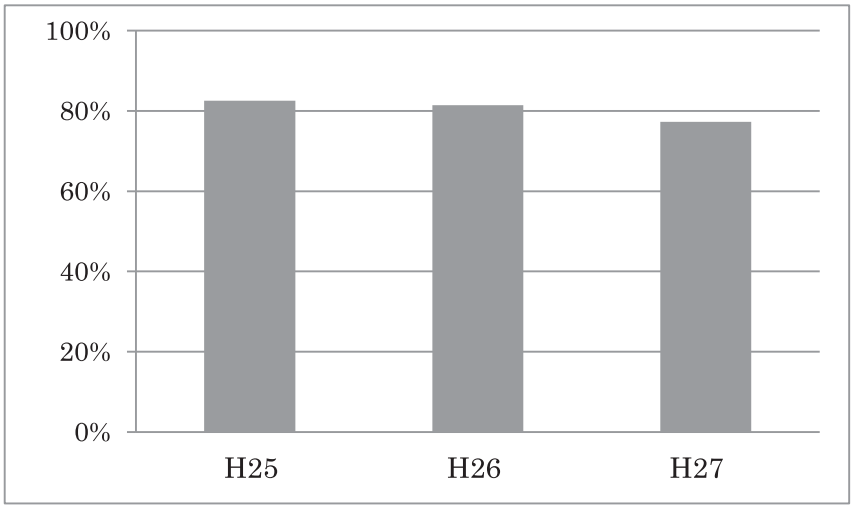
退院調整看護師の役割を知っている



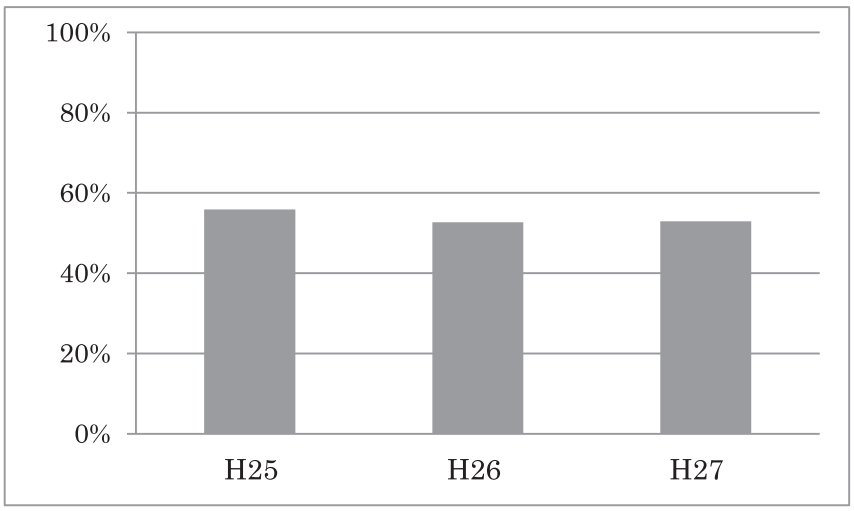
民生委員・児童委員の役割を知っている



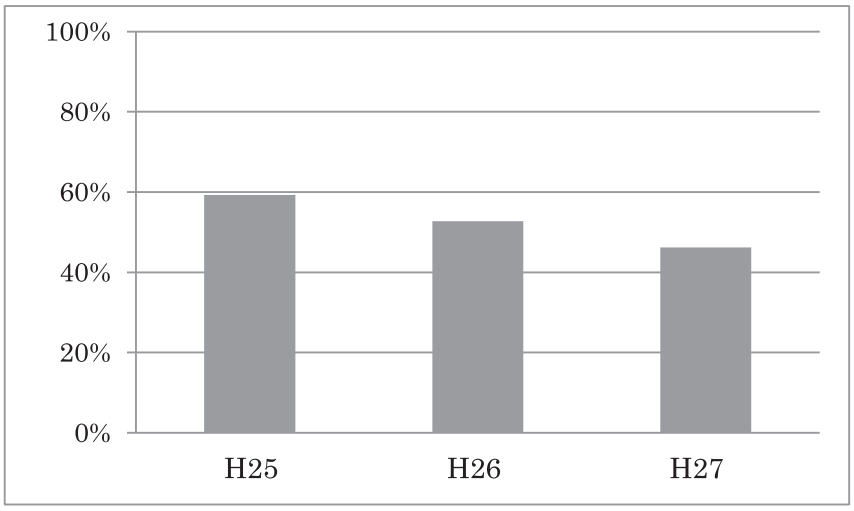
「多職種間連携」という言葉を知っている



地域住民のネットワークについて知っている



地域住民のネットワーク構築を支援する看護職の役割を知っている



学生の「継続看護」の理解は、横ばいである。「退院調整看護師の役割」や「病院の地域連携部門の役割」については、事業開始時点ですでに 7 割前後の学生が理解していたことから、今後、あまり大幅な上昇は見込めないのかもしれない。

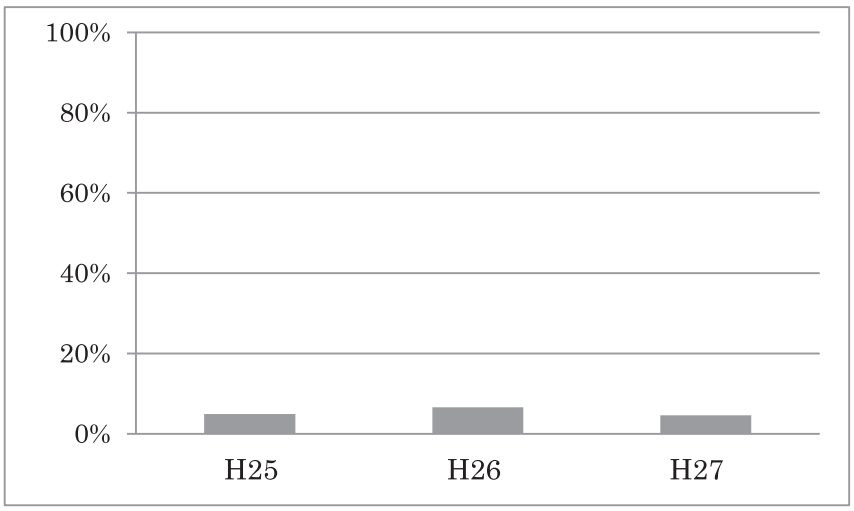
「多職種連携」の認知度についても横ばいであるが、事業開始時ですでに 8 割以上の学生が知っていた。ただし、単に言葉を知っているというレベルにとどまらず、実践的な連携のあり方を理解できるように、専門職間連携に関する学習の機会を増やすことが望ましい。

なお、大学院生については、２７年度より「コラボレーション看護論」を開講したのに加え、２８年度にはチーム医療に関する実習が開講される。多職種連携の核となる看護人材の育成にあたり、これらの科目がどのような効果をもたらすのかについて、来年度以降検討していきたい。

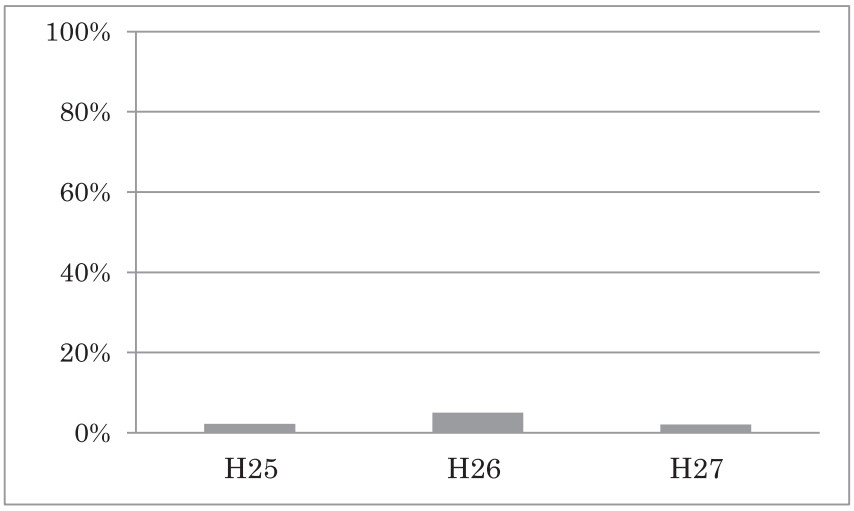
(5) 進路希望

各質問に対して「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と回答した者の割合をパーセンテージで示した。

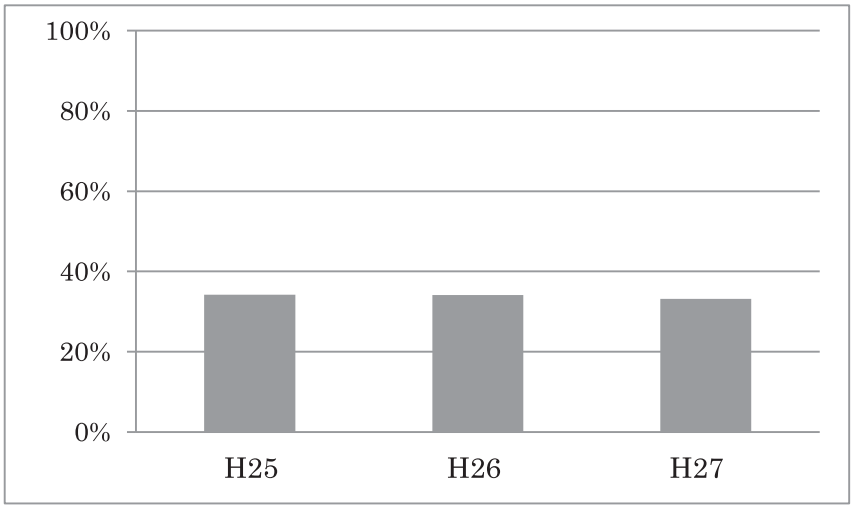
卒業後すぐ、訪問看護ステーションで働きたい



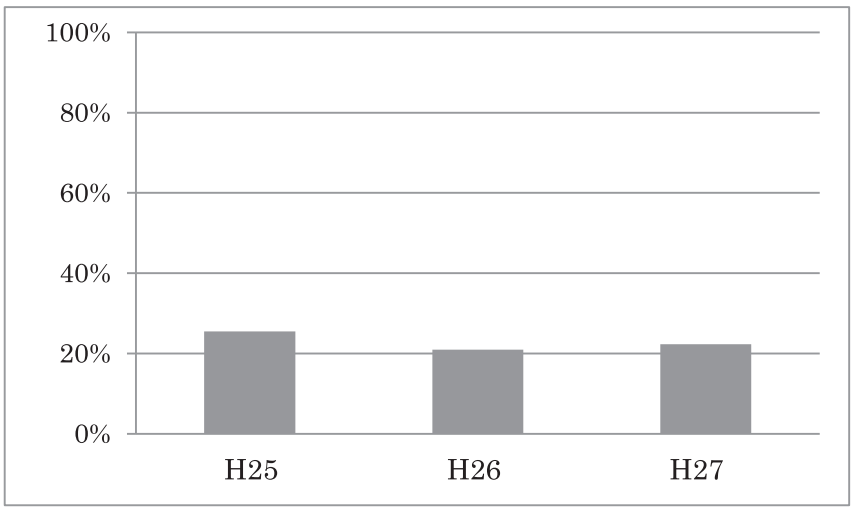
卒業後すぐ、介護保険施設で働きたい



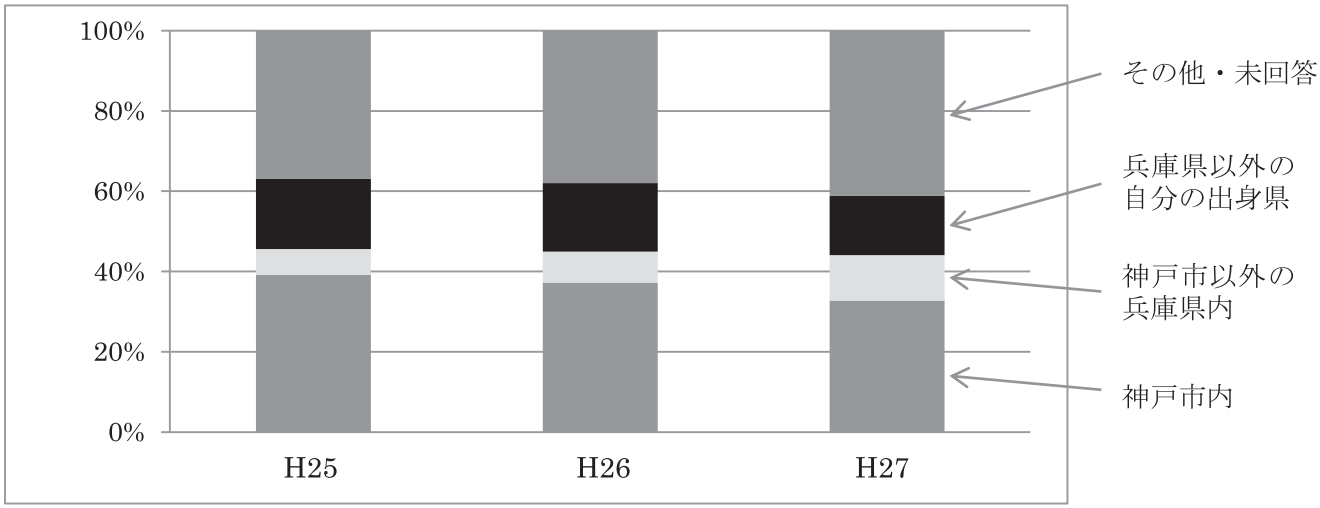
卒業後ある程度経験を積んだら、訪問看護ステーションで働きたい



卒業後ある程度経験を積んだら、
介護保険施設で働きたい



就職希望地域



進路希望地域は過去 3 年とも、ほぼ同様な結果となった。本学の地元である神戸市または兵庫県への就職希望者は、45%程度で安定している。ただし、「地域のための大学」としての本事業の取り組みの趣旨に鑑みれば、この地元就職希望者の割合が上昇することが望ましく、それを目標としなくてはならない。例えば、現時点で神戸市在住の学生が約 6 割であるのに対し、神戸市内への就職希望者は 3 割強にとどまっている。一つの目安として、神戸市内の居住者の割合と就職希望者の割合が同程度になることを、残り 2 年間の目標値とすることが考えられる。

訪問看護ステーションと介護保険施設への就職希望に関しても 3 年間ほぼ同様で、「卒業後すぐ」と答えた学生はいずれもわずかであった。ここには示していないが、学年別に見ると、「卒業後すぐ」に対して「全くあてはまらない」と回答する学生は高学年ほど多くなっていた。これはおそらく、高学年になって臨地実習の経験を積み重ねるほど、卒業後すぐに訪問看護ステーションなどに就職することの困難さが身に沁みてわかってくるということであろう。こうした学生の心情に鑑みても、「卒業後すぐ」には必ずしもこだわらず、長期的なキャリアプランとして訪問看護ステーションや介護保険施設での就労を

視野に入れる学生を育成していくことを主とする考え方でよいと思われる。

２）学生座談会　発言のまとめ

(1) 概要

本事業の中間評価を目的として、平成 27 年 12 月 11 日に学生座談会を学内で実施した。参加者は、2 年生・3 年生それぞれ各 3 名、および担当教員 2 名であった。2 年生は 1 年次のコラボ教育科目と 2 年次の基礎看護技術演習Ⅰ・Ⅲを履修していること、3 年生は同 2 科目に加え、3 年次の領域別臨地実習を履修中であることから、これらの学年を対象とした。

教員の問いかけに対して学生らが自由に答える方式により、約 1 時間にわたって談話した。参加学生の選定は概ね無作為に行われており、特に意識の高い学生や本事業に批判的な学生に偏って選ばれたという傾向はなかった。以下は、(2)コラボ教育で学んだことや経験したこと、(3)神戸市について、(4)COC 事業について、の 3 項目に分類して、学生らの発言要旨をまとめたものである。

(2) コラボ教育で学んだことや経験したこと

＜2 年生＞

- あまり高齢者の方とか関わる機会がなかったので、演習とかで住民の方とかと初めて関わってみて、思ったより若々しい。私が 60 代ぐらいかなと思ったら、80 代とか、そんな感じで全然印象が違っていました。その時には、知識とかあまりなくて、今は老化と老年病とかでその高齢者の特徴を勉強していますが。その時は、あまり知識とは繋がらなかったかなという感じはありました。演習では出会った住民の方は何か慢性的なものがあっても元気な方が多かったけど、実習ではちょっと違った感じで、そこの繋がりが自分のなかではあまりできてなくて、もっと知識を持って行ったらよかったなと思いました。
- 私はCOCの2年の前期の時に高齢者の方の骨密度とか、関節可動域とかを測らせてもらった時に、それまでは学生同士とかでやったり、高齢者との接し方とか教科書や文字だけで学んでいましたが、実際接してみたら、高齢者の方が自分の健康にすごい気にしてるなというのをされているなと感じた。数値とかを気にして、「どうですか」と聞かれたりして、初めて、「すごく関心あるな」と思いました。その時、数値を上げるためにどうしたらいいというアドバイスとかが全然できなくて、「大丈夫ですよ」とか、そんなことしか言えなかった。（演習に）行くまでには、測り方ばかり練習していたので、どうしたら改善できるのかという点とかも自分で持っておかないと何も言えないなというのはすごく感じた。実習であれば全然違う、寝たきり状態ぐらいの人を受け持たせてもらったので、確かにどっちも初めてのことで繋がりがあまりなかったのかなと思いました。
- 学外演習で、私も初めて自分たち以外の人に血圧とか測ったりして、いろいろ学びがありましたが、そこで思ったのは来てくれる人たちは意識の高い人たちばかりで、そうじゃなくて、自分たちがもっと対象にしていかないといけないのはそこに来れてない人じゃないかなと思いました。それをその時感じたんですけど、結局そのあとどうしたらいいのだろうというか、考えたけど全然それが行動にいつも移せてなくて。COC も結局、地域に住む人々、みんなを対象にするというのができていないのではないかと感じていて……。

- 慢性とかで地域の人が話に来てくれたり、他の演習の時も来てくれましたが、実際の話を聞かせてもらったら、学生の私たちは教科書じゃなくて実際の言葉とか聞いて、「そういうふうに考えてるんや」とか、その生活のなかで困ることとか、自分たちの症状云々だけでは考えられない実際のこととかが聞けて、そういうのがすごいいいなと思って。だからそういう話を聞ける機会がもう少しあったら、事業に対してももうちょっと意欲的に取り組めるかなと思います。

＜3年生＞

- 2年生の時に基礎演習Ⅲで、初めて自分たちと同じ年齢以外の方の血圧とか測ったりして、脈拍とかも測らせてもらいました。いつもだったら、だいたい同じぐらいというか、血圧とかも大体これぐらいかなという感じでしたが、全然いつもやっている人と違うところを経験させてもらって、あとはいろんなお話も聞かせてもらったりすることもなかったので、すごくいい経験になったかなと思います。あと、健康生活支援学実習も、最初は正直、この実習の意味がよくわからなかったが、段々やっていくうちに地域で生活する方とか、その地域でその方がどういうふうに生活しているかとか、その方の健康観はどういうものかというところに着目して、それで病院で出会う人とかは、実習とかだったら病院がメインですが、その人の人生というか、生活は病院だけではなく、家でずっと生活してというのがあるので、そこをまず病院の実習に行く。基礎では行っていますが、その間で家での生活とかも見られるのは、やはり次の実習でも何となくイメージができたかなと思いました。
- コラボ教育に関しては2年生の健康支援学実習までは必修で受けないといけないが、3年生から保健師課程を取る人と取らない人が分れてきて、健康学習論とかも選択科目になってくるので、そこら辺は学修の積み上げのラダーでやるのであれば、繋げられたほうが良かったのではないかと、（資料を）見て思いました。もったいないというか。健康支援学実習で学んだことが今後の領域別のほうにしか活かされていかないというので、保健師の人はそうじゃないと思うが、看護師の資格しかとらない学生に関しては、もっとトライできるほうが良かったのではないかと思いました。自分は健康学習論を取っていたが、保健師にはならないが、何かもったいないなと思います。
- 私も健康学習論の話ですけど、この講義を取っていて実際に自分たちでどのようなプログラムを地域の方々に実際に来てもらって行うかというのを考えて、その時は私も保健師課程を取らないので、保健師の方は集団を対象とする健康教育をやると思いますが、看護師としてはどこで実践する機会があるのかなと思いましたが、ウィメンズヘルス実習のところで実際に看護師さんがその産後の生活について、褥婦の方々の集団で退院指導しているところを見たので、そこで私は健康学習論の時に実際に自分があまり看護の知識がない人たちにどういうふうに言ったらわかりやすいのかとか、どのように進めていったら興味を持って聞いてもらえるのかというのを考えていたので、そこのウィメンズヘルスで実際に集団に対する退院指導を見て、健康学習論で学んだことが今ここで学んだからこそ、ここで看護師さん達がこういうことに気を付けているなというのがわかったので、そこが活かせる部分があった。さっきも（別の学生が）言っていたみたいに、ここで全員が取っているわけではないのでもったいないかなという気がしました。
- 地域の人だけじゃなくて、保健師さんとか、実際、保健師さんの仕事は何してるんやろうというのがあるので、やはりどのようなものだろうか、現場で働いている人の声がもっと聞きたいなというのがあります。

(3) 神戸市について

- 出身は大阪ですけど、小さい時から神戸に住んでいて、昨日、改めて神戸学とか、神戸で働いておられる保健師の方とか来ていただいて、実際、神戸の人口とか神戸市で活動している保健活動とかを知ったことは、神戸にずっと住んでいたけど知らなかったので、それはすごい知識として活かせていると思います。
- 健康生活支援実習で、実際神戸市の自分の地区を歩いて、その地域の方にお話を聞けたのは、授業だけでは学べない、一人ひとりの健康観とか生活を知る機会になったので、最初はほんとに地域を歩いて話聞くというのはどうしようかなと思っていたのですが、実際に話を聞いて、その一人ひとりの、地域に住んでる方の健康に着目して考えられたのはいい機会だったと思います。
- はっきり言って、自分は神戸学は、「へぇー、そうなんや」で終わりです。別に神戸に住んでいたわけでもないし、別に神戸好きなわけでもないし。好きでもそんな神戸愛があるわけでもないから。別に……
- 私は神戸に住んでいたから、神戸市って結構面白いなと思いました。神戸の地名とか知らない事もありましたし。
- 地域特性とか地域の課題とか、そういうのってすごい大事だと思います。たぶんその人が戻られる地域、患者さんが一人ひとり戻られる地域がたぶん違うと思うし、たぶんそこの地域の特徴とか特性とかも違うと思うから、何かそういうのをどうやって学んでいくのかとかをもう少し詳しく教えてもらっていてもいいのかなと。だから健康支援学実習でやりながらみたいなところもあったと思いますが、そういうのもちょっと知ってもいいのかなと思います。
- 神戸学は楽しかったです。私の地元はすごく田舎で高齢者ばかりだけど、そういうところどう違うのかとか、何か神戸市の持つ魅力とか、そういうところがあったら面白いかなと思います。
- （こういう授業を受けたからと言って神戸市に就職しようとは思うか、という質問に対して）　また別です。
- 嫌でも神戸のことは知りますけどね。長田区は高齢化が進んでいるのは、この 3 年間でも嫌というほど何回も言われてきているから。
- （神戸のことをいろいろ教えられるが故に、自分の地域についてもっと関心を持つようになったとかのではないですか、という質問に対し）　持たないといけないなと思いつつ、あんまり実際には調べてはいないという感じです。そこまで……
- 神戸のどこに高齢者が多いとかいう授業を受けたけど、それが神戸だけの特徴とはあまり捉えていません。自分の住んでいるところとそんな変わりがあるのかなと。自分の地元とか知らないですが、高齢者の特徴とか、どうなっているのかわからないですが、でもそういう感じで見てなくても、変わりない感じなのかなと思っています。その辺はあまり記憶には残っていないです。

(4) COC 事業について

- 負担は増えるかもしれないけど、もう少し準備したらよいと思います。福祉センターみたいなところを訪ねる時も、（教員から）言われたことは、やるけどみたいな。期間的にはそんなにやった感じはあまりしない。（事業について）どんなことをやるというのも、大ざっぱには聞いてるけど、雰囲

気とか解らなくて。ちゃんと知っていたら、知識も持って行ったのになと思います。

- もうちょっと住民さんが参加するような授業があってもいいと思います。出向くだけではなくて。
- 行って終わりみたいな感じになるよりかは、そういうのがあったほうがいいのかなとは思います。１回行って、課題としてはそれで終わりみたいな、授業として終わりというよりかは、継続性があったほうがいいとは思います。
- 基礎演習で教育ボランティアさんが来てくれて、グループでちょっとずつ車椅子とか、介助とか清潔援助とかするというのがあったのですが、準備期間というのがすごく短くて。その前にアセスメントを提出が何枚もあって、そのあとすぐ、注射の試験があって。その次の週の 2 週間経たないうちに、そのボランティアさんが来てくれたというのがあって、時間というかそこで初めてまた話し合って全員で計画立ててというので、ちょっと時間が少ないと感じます。もうちょっと考える時間欲しかったなと、完全にできなかったから、ボランティアの方にもちょっと申し訳なかったなと思います。
- 全部準備期間だと、そういう発想は持っていませんでした
- もっと準備しておけばよかったとか、その時には思うけど、実際にはそこまで。終わった後にも、「復習しておいてね」と言われるだけで復習する時間が授業内ではなくて、結局、班のみんなもバタバタしてできなかったから、学習、準備する期間もそれを振り返る期間ももうちょっと授業内で欲しいなと思います。
- １年生の後期がしんどかった。
- すごく根本的なことですけど、たぶんさっき言ったように神戸学とか学びとか、知らないところで結構繋がっていて、患者さんと話すときとかに勝手に活かされていたり、繋がってる部分がすごく多いと思いますが、そもそもＣＯＣについての大学からの説明がすごく少なかったなと思っています。１年生とか２年生の時に。「ＣＯＣやります」「ＣＯＣって何」みたいな。「センター・オブ・コミニティで地（知）の拠点事業で」「通りました」みたいな。「やります」って言われて、よくわかってないけど、わからんままにＣＯＣやるらしいみたいに始まって、 ＣＯＣ入って、「ＣＯＣってなんかよくわからんけどこんな感じやし」みたいな。「やりました」みたいな事が、すごく多かった気がします。
- 授業の中の時間割りにＣＯＣと書いてあって、なんでと思った。
- オリエンテーションで、「ＣＯＣというのが通って、今こんな感じでやっていきます」みたいな。今いち、何をもっと具体的にするのかがわからないままやって、やっていくうちに、「こういうことが目的にしてるんやな」っていうのがわかっていったんですけど。最初に、もうちょっと具体的にわかっていたらよかったかなと思います。

(5) 総評

コラボ教育科目については、地域住民の方々と触れ合う授業や演習への肯定的発言が多く見られた。ともすると病院などのベッドサイドにしか目が行きづらい学生たちにとって、非常に貴重な学びの機会となっていることが窺われた。一方、神戸市や本事業に対する認知度等については賛否両論であり、特に「COC という名前が一人歩きしていて、中身が見えない」という指摘は、学生以外の評価においても同様な課題が浮き彫りとなっている。こうした点を見据えた行動計画が必要であると考えられる。